
死神になりました

深山 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神になりました

【Nコード】

N1820BA

【作者名】

深山 雅

【あらすじ】

俺、死にました。そしたらやたら軽〜いノリの神様が現れました。え、俺が死んだのってコイツのせい？しかも死神になれって？ふざけんな。

ああ、でも仕方が無いから腹括ってやってやるよ！

1 俺、死神になりました（前書き）

この作品は、ノリで突っ走っているギャグ作品・・・のつもりです。

主人公（女）の一人称が『俺』です。性格も男勝りな上にかなり凶暴です。そういうのが苦手な人は注意してください。

1 俺、死神になりました

ハイ、コンニチワ。

俺の名前は識沢^{しきざわ}秋^{しゅう}。15歳の高校1年生です、一応。

早速ですが、俺、死にました。

でも全然覚えてません。死んだ原因が何だか、まるで解りません。なのに何で死んでるってことは解るかっていうと、今俺が呼吸を必要としてないからだ。だもんだから心鎮めて耳を澄ましたが、鼓動も聞こえない。だから、多分そうなんだろうーなって。

あ、ついでに言っとくと俺、女ですから。一人称『俺』でも、性格こんなんでも、口が悪くても、男顔でも、女ですから。

大事なことから2回言いました。

最後にもう1回。俺、女ですから！・・・一応。

まあそれはそれとして、何で俺がここにいるか、教えてもらおうか。コイツに。

「じゃ、じゃあ足をどけなさい・・・」

あ、なんか言った。

俺の足の下にいるのは、1人の男。大体20代中ごろで、金髪碧眼、美形、長身瘦躯、白い服を着ていて翼を生やしている。

まあ、わざわざ説明する間もないな。

ぶっちゃけ、凄まじくありがちな神様スタイルだ。

それが何で床に這い蹲って足蹴にされているか？答えは簡単だ。

俺は気が付いたらここにいた。この何も無い、白の世界に。

で、ここどこだよ、とか考えて。

あ、俺ひよっとして死んだ？とか解って。

んで、ちよっとポケーっとしてたら、目の前の空間がパツクリ裂

けてこの男が出て来たワケよ。

しかも。

『やあやあ、ちゃんと来られてるね!?!』

と、すげーイイ笑顔でグーサイン出しやがった。それも両手で。俺がキレても、可笑しくないと思う。まあ、やりすぎた感はあるけど。

早い話、回し蹴りを叩き込んでやったんだ。米神に思いっきり。んで、そのまま踏みつけてる。グリグリっとね。

でもこのままじゃ話が進まないから、取りあえず足はどける。

「ちよ〜つと〜! 僕神サマよ!?! この扱い酷くない!?!」

やっぱ神か。けど軽いなオイ。

「黙れ。神らしく扱って欲しけりゃそれなりの威厳ってモンを見せてみろ。」

少なくとも、軽い笑顔とグーサインは無いだろ。

聞いた話を纏めると、やっぱり俺は死んだ。

けどその死因が・・・。

「オイこら、どーゆーこった。」

「いや、だからだね・・・」

「つまりは、テメエの怠慢だろーがっ!! しかも、それを誤魔化すためにあんな軽いノリを出して押し切ろうとしたんだろーが、アア!!!?」

「ヒイイイイイイイ!!」

現在、神の胸倉掴んで揺さぶってます。

けど、無理ないって。

俺はどーも、コイツのせいで死んだらしい。

話によると、神々はそれぞれ担当する魂が予め決まってるんだと。んで、コイツは俺の担当だった。

一柱の神が担当する魂は膨大な数に登るらしく、かなり多忙を極

めていたらしい。・・・だからって、そりゃねえだろ？

神さま業務の1つに、寿命を迎えた魂の持ち主を・・・まあ早い話、死なせるってのがあるらしい。

人生では1枚ずつ書類みたいなモンがあって、ソレには今生での寿命が記されてて、その日になったらシュレッダーにかけて処分するんだと。

なんだその処分方法は。

ちなみにソレはあくまでも『その時の人生』での書類で、『魂そのもの』の書類は別にあるらしい。住民票と戸籍の違いに近いって言われた。

で、だ。

問題なのは、コイツが俺を『間違って』処分しちゃったってことだ。

どうも、コイツが担当している別の魂が寿命を迎えたけど、忙しさに目が回って、そいつと俺の書類を取り違えたらしい。で、そのままシュレッダー逝き、と。

誤字じゃないぞ、念のため。

俺が再度ブチギレしても、仕方ないだろ？しかもその忙しさの理由が、フザケてた。

ただでさえ激務だってーのに、コイツときたら、前夜キャバクラでニャンニャンしてたもんだから朝寝坊して、それで遅刻したから午後からに仕事が詰り。結果、目が回るほどの忙しさと相成った、と。

否、てかなんで神がキャバクラ行っただよ。

俺は辻褄合わせのために、急死させられたらしい。普通に道を歩いてたら、落ちてきた植木鉢が頭を直撃したんだと。何、その死因。ついでに言えば、俺と取り違えられた奴ってのが。

「15歳のクッキーちゃんです。」

言われて見せられた写真に写ってたのは・・・。

「おいテメエ、こりゃ犬じゃねーかよ。」

「そーだよ。ちなみに♀です。老衰で死ぬはずだったんだよ。いやあ、同じ15歳のオンナノコだってんでね。間違えちゃった。ゴメンネ？」

軽すぎだこの野郎。よし、これからコイツのことを軽男かるおと呼んでやろう。

同じ15歳でも全然違うだろうが。人間なら『これから』、犬だと『これまで』。確か犬の年齢って、人間に換算するには×7するんだっけ？15歳だと100歳超えてる計算じゃん。死んだって大往生だろ！？

「ついでに聞いておく。俺は本当ならいくつまで生きるはずだったんだ？」

「えーと。」

軽男は台帳みたいなモンを捲り始めた。

「君は特に大きな怪我も病気もすることなく、至って健康的に132歳まで生きてギネス記録を更新するはずだった・・・ん、だって・・・。」

「・・・よし、取りあえずもう1回殴らせろ。」

「え、あ、ちょ、ちよっと、待・・・」

聞く耳持たん。

俺の右アッパーが、軽男の顎にクリーンヒットした。

「だから、ゴメンって!!」

俺のキレっぷりに、流石のこの軽男も殊勝に謝りだした。口調はアレだけど。それでも、正座で両手を合わせてる。

「許してよ。ただでさえ僕、最高神サマにどやされてきたばっかなんだし。」

語尾を延ばすな、語尾を。

てか、いるのか、最高神。やっぱ神にも序列があるんだな。

「でね、ここからが本題なんだけど・・・ごめんなさいもう語

尾伸ばしません伸ばしませんからその思いっきり振りかぶった右腕を下ろしてくださいお願いします!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仕方が無いから、下ろしてやった。

「うん、単刀直入に言わせて貰うとね? 君、神サマになる気、無い?」

「無い!」

「・・・・・・・・そんなこと言わないでよ。でないと僕、また怒られちゃうよ、最高神サマに。」

「知ったことか。勝手に怒られてろ。てか、何の因果関係がある?」

よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに目を輝かせる軽男。

「それがね、君が死んじゃったのってホラ、こっちのミスでしょ?」

「お・ま・え・の! ミスだろうが! 他の誰にも責任無えよ! 『こっち』とか連帯責任っぽく言うな!」

「はいごめんなさい僕のミスです認めます認めますから蹴らないでくださいお願いします!!・・・・コホン。とにかく、それであるりにも申し訳ないんで、新たな人生のチャンスを与えようってことになったんだ。原則、生きとし生ける者は死した後には輪廻の輪に乗って新たな人生を歩むこととなる。まあ、生まれ変わるってことだね。その場合、本来なら前世の記憶は受け継がない。まあ、稀に覚えてるヤツもいるみたいだけど。でも、君は寿命前に死んだ。そのせいで輪廻の輪から外れちゃってさ。このままじゃ生まれ変わらない。」

「じゃあ、生まれ変わらなくてもいい。さっさと天国にでも連れてってくれ。」

「アレ、君自分が天国に行けるコだと思ってるの?」

俺は肩を竦めた。

「そこまで善人とも思わないけど、地獄に落ちるほどの悪行を行

った覚えも無いからな。」

「・・・君、今、すっごい暴行を働いたよね・・・？」

「自業自得って言葉、知ってるか？」

「いや、でも、痛かったし・・・僕、一応神サマだし・・・」

「何か言ったか？まさか、文句でもあんのか、アア？」

「言ってません文句なんてありませんだから指を鳴らさないで下さいお願いします！！」

よし、素直でよろしい。

「と、とにかく！最高神サマ曰く、これは大変な不祥事で、このまま君の魂が迷子になっちゃうと、僕が責任とって地獄に落ちなきゃいけなくなるんだよ！」

「落ちろ。」

「即答！？少しは迷ってよ！？」

知ったことか・・・ん？ちょっと待て。『魂が迷子になったら？』

「おい。俺今、魂だけの状態なのか？なら何でお前を殴・・・じゃない、ボコリ・・・じゃない、制裁を与えることが出来てんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・テヘ？」

「・・・よし、そこに直れ。」

「ごめんなさい説明しますみっちりきっかり説明します一から十まで説明させて頂きますいえ説明させて頂きお願いします！！」
グバァと土下座してきたので、優しい俺は柔軟を中断して先を促してやる。

「えっとですね、早い話、今の貴方には肉体があります、ハイ。というの・・・僕、地獄に落ちたくなかったから・・・」

「・・・最高神サマとやらは、何て言ったんだ？俺に決定権や拒否権は無いのか？」

「いや、その・・・」

「あったんだな、俺に・・・それをテメエが無断で押し通した、と。」

「だって・・・15歳の女子高生が、こんな凶暴だなんて・・・」

・・・あ、いやその・・・」

「つまり、ゴリ押しする気だったんだな？あのウザい笑顔と軽いノリで押し切るつもりだったんだな？」

「ええ~~~~~~~~と・・・」

「返事！」

「はいその通りですごめんなさい反省してますこの通りですだから乱暴しないで下さいお願いします！！！」

軽男、半泣きで五体倒置。

てか、そろそろ飽きてきたなこの反応。

軽男が落ち着くのを待って、俺たちは向かい合って座った。

「最高神サマが言うにはね、君の魂はもう既に輪廻の輪から弾かれてる。それなら、天国なり地獄なりに送るって措置の方が簡単なんだけど、さっき君自身も言ってたように、君ってば地獄に落ちるほどの悪行は働いてない代わりに天国に行けるだけの善行も行っていない。だから困っちゃったんだよね・・・でも、やっぱりこの件に関しては君に責任は無い・・・ごめんなさい言い直します、君に責任は『一切』無いから、このまま迷子になられたら神の威厳に関わる。」

何を怯えてやがる、ただちよつと睨んだだけで。

「・・・あんな軽いノリで現れた時点でその威厳とやらはもう地に落ちてるけどな。」

「と、とにかく！だから最高神サマは、君が望むならば神に取り立てるって。」

「望まなかったら？」

「特例として、天国に行かせてあげるって。でもその場合・・・ミスを犯した僕が、その代償として地獄に行かなきゃいけないって言われて・・・つい・・・。」

「つい、俺の返事を聞かずに神になるよう申請した、と。」

「はい・・・。」

「取り消して来い。」

そんな、と軽男は青褪めた。

「何がそんな、だ。聞いてみりゃ、決定権は完全に俺に有るじゃねえか。正当な権利だろうが。俺は天国に行きたい。」

「そんな、ね、殺生な！」

「俺の死の原因作ったヤツに言われる筋合いは無え！！」

俺の言ってることは、乱暴かもしれないけど正論だと思う。だからだろうか、軽男はグツと言葉に詰った。

「……その、通りだけど……ねえ……お願いだから……」

終いには泣き出す始末。中身はともかく、見た目は優美な美男子がハラハラと涙を流す様は、1枚の名画のようではあった。

地獄ってのは、よっぽど嫌なトコなんだろう。軽男にしては、珍しく本気で哀願している。

俺は善人なんかじゃない。けど、悪人でもないつもりだから、こんなマジ泣きされたら多少怒りも冷めてくる。

「ハア……で？」

「？」

「早く話せ。取りあえず聞いてやるから。」

軽男は、それはそれは嬉しそうに微笑んだ。

「君には、死神になってもらいたい。」

「……ハイ？」

ワンモアプリーズ？

「だから、死神。」

「……よし、やっぱりその最高神ってののトコ行って取り消して来い。」

「わわっ、待って待って！死神を誤解してるよ！……あのね、人間は死神を『死を呼ぶ神』だと思ってるのが多いみたいだけど、実際には『死を司る神』なの！例えば、死んだモノをあの世に送っ

たり・・・つまり、死神がいるから何か死ぬんじゃないくて、何か
が死んだから死神が行くんだよ。逆に、『死を司る』わけだから、
寿命を迎えるはずだったモノを助けたり、ね。まあ、イメージ通り
に、寿命を迎えてないモノに死を与えることも可能だけど。」

ああ・・・死神にも色々あるんだな。ソレは納得した。でも、何
でいきなり死神？

「死神ってのはね、言ってみれば見習い神なんだよ。ノルマをこ
なした死神だけが、正式な神になれる・・・つまりは、神になろう
と思ったら誰でも通る道ってことだね。かくいう僕も、死神をやっ
てたことがあるし。」

「神話とかで、そんな話を聞いたことはないぞ？」

「うん、まあ・・・わかりやすく言えば、地方公務員と国家公務
員の違い、かな？僕たちのように、あらゆる並行世界を股にかけて
るのが国家公務員。各次元を管轄してるのが、地方公務員。で、死
神時代ってのは、国家公務員試験、かな？だから、そんな神話とか
は無いと思うよ。」

・・・この軽男が国家公務員・・・キャバクラでハメを外し
ぎて仕事で大ボカかましたコイツが・・・嫌過ぎる。

やめよう、こんなことを考えるのは。

「ノルマってのは？」

「魂の回収・・・まあ、当然かな？死んだモノの魂を回収すれば
いい。ただ・・・その数が・・・。」

「数？」

「僕は、犬として死んだモノの魂を集めろってものだった。その
数は1万。」

「1万！？てか犬！？」

「何として死んだモノの魂を集めるかってのは、最初に決められ
る。席があるから。君の場合は、何の因果か、人間として死んだモ
ノの魂を集めることになる。空いてる席がそこだから。」

「へえ・・・で、数は？」

「その……………200億……………」

……………あれえ、何か耳が可笑しくなったよーな……………。

「200か？」

「200億。」

現実はありませんでした。

「待て待て待て待て待て。確か世界人口すら70億に届いてなかったはずだぞ……………」

てか、お前が1万で俺が200億って、何だよそれ。

「僕はそもそも、神となるべく生まれた魂だから。でも君は違う。その分、壁が厚くなっちゃったんだよね。」

「よし、やっぱ最高神のトコに行って来い。」

「待ってってば！何年、いや何十何百何千何万年かけてもいいんだよ。君のその肉体のスペックはもう神と同等で、不老だから！流石に不死ではないけどね。でもそれも、気を付けるのは怪我ぐらいで、寿命も病氣も無いから！」

「冗談じゃない、何万年もかけてたまるか！！！」

俺は人間だぞ！？少なくとも意識の上では人間だ！そんなのバケモノじゃねーか！

「バケモノって、失敬な！神だよ、神！！大丈夫、その内慣れるから！」

はつきり言って、慣れたくない、そんなもの。

ああ、もう！！

「……………1つ聞いておく。」

俺は頭を掻きながら出来るだけ落ち着こうと心がけた。

「そのノルマをこなして昇格した後は、どうなる？お前みたいに事務処理をしなきゃならんのか？」

軽男の答えは、否だった。

「色んなのがいるからね。人間でもいるでしょ、試験に受かってもそれを生かさない人とか。死神期間を終えても神にならず輪廻に

戻っていくモノもいる。逆に神になったとしても、業務は色々あるからねえ・・・僕のように事務処理してるのもいれば、各次元の神々との連絡を請け負うヤツもいるし、創造神っていうの？新しく世界を造ったりするのもある。」

「・・・・・・・・ハア。」

オーケイ、もういいや。

「解ったよ、神サマやってやるよ、それでいいんだろ!？」
もうやけっぱちだった。

「じゃあ、解ってくれたところで・・・これを。」

軽男が渡してきたのは、首飾だった。チェーンは細く長い。ペンダントトップ、というのかな、そこはチェーンと同じ銀色で円形をしていて中に五紡星が入っている。その5つの頂点にはそれぞれ小さな宝石が入っていて、時計回りに黄・赤・青・緑・茶の色に輝いている。そしてその中央にはそれらより2回りほど大きそうな黒い宝石。サイズ自体はあまり大きくないから、邪魔にはならなさそうだが。

「何だ、賄賂か？」

「違う!これは死神の証明みたいなモノなの!いい?」

軽男は真ん中の黒い宝石を指し示した。

「これが『門』。死したモノの魂は、ここからあの世に向かう。」
ほお。

「周りの5つの宝石にはそれぞれ特殊な力がある。まずこの黄色いのは、変化の力。神は不老だって言ったよね?でもこれを使えば、外見年齢を変えることが出来る。」

ええ、何だそのテクマクマヤコン。

「次にこの赤いの。これは収納機能。色々道具を保管しておける。」

四次元ポケット?

「青いの。これは翻訳機能。言語だけでなく文字も訳してくれる」

スグレモノ！」

今度はほんやくコンニャクか？

「緑のには、記憶能力。映像でも音声でも、何でも記憶・・・というか、記録しておける。」

ビデオ？ いや、DVD？

「最後に茶だけど・・・これはちょっと厄介。次元移動をする時に使うんだけど、それはとっても力を使うから多用はできない。」

あれ、よく考えたらこれって・・・モコナ？ ツバサ？

いやいや、そんなことを考えても仕方が無い。

「これを受け取り、首に架けた時点で君は死神決定だ。以降、ノルマを達成するまでは外せない。ああ、風呂や海に入っても錆びたりはしないからその点は安心してね。そしてコレの持ち主は君として登録されるから、他のモノが使おうとしても使えなくなる。」

「腹は括ったんだ、さっさとよこせ・・・決心が鈍る。」

言うとな、軽男はさっさと渡してきた。よっぽど地獄が嫌なんだな。

「そして、これはオマケ。」

「ごそごそと懐を探っていた軽男が取り出したのは。」

「・・・・・・iPad？」

そう、生前よく見た情報端末だった。いや、俺個人は持ってなかったが。

「違うよ。これはね、今最新の神サマお役立ち必須アイテム、その名もG P a d ！ あ、GはG O DのGね。これをこうすると・・・」

軽男はソレのパネルをポンポンと叩いて操作しだした。

「色んな情報が検索できるんだよ！ 普段はホラ、首飾の赤い宝石で収納しとけばいいし！」

パクリじゃねえか！ まんまi P a dだっつうの！

「何か頼みたいことがあったら、メールするからね。あ、逆に君がメール送ってくれてもいいよ？」

・・・・・・もうツツコむ気にもなれん。

右手に見た目iPadなGPad, 左手に首飾。
どんな状態だコレは。

「さて、ここからはおねだりタイムです。何か特典が欲しかったら言ってね。1つだけ何でも叶えてあげられるんだ。」

「何でも・・・って？」

「例えば、綺麗になりたいとか、スタイル抜群になりたいとか、天才になりたいとか。ちなみに僕は、容姿をもらっちゃった。」

ああ、転生トリップ（と言っているのか、俺の場合）にありがちなヤツね。てか死神特典なのかよ、そのお綺麗な顔は。どうせならその残念な頭を取り替えてもらえばよかったのに。

まあ、そうだな・・・あえて言えば。

「魔法が使えるようになりたいな。俺が知る限りのありとあらゆる魔法。」

「ありとあらゆる？」

「そう・・・そうだな例を上げれば、ハリポタとか、ドラクエ（ダイ大含む）とか、その他色々。」

「・・・・・・欲張り。」

「どこがだ。俺、こんなに謙虚じゃないか。」

お前の地獄行き阻止のために神サマやってやるってんだから、これほど優しいヤツはいないだろ？

「じゃ、とりあえず、それだけのスペックは与えておくよ。ただ、ちよつと制約がある。ちゃんとした使い方を知らない、使えない。」

「ええと、つまり・・・メラとかヒヤドとか、エクスペリアームズとかのように呪文とかを知ってるのは使えるけど、呪文だとか技術だとかを知らないのは使える素養はあっても使えない・・・とかか？」

「理解が早くて助かるよ。ただ、素養はあるから学べば使えるようになれるよ。そうだな・・・初期魔力は、メラゾーマを20連発

できるぐらい、にしとこうか。」

オイ、それポップじゃねえか？とか、そんなことを考えてると、軽男が苦笑した。

「尤も、容姿や精神、頭脳と違って、身体は神のソレだから、そもそも肉体的なスペックって普通の人間の比じゃないだけだね。初期値は生前と同じだろうけど、鍛えれば底なしだよ。頭打ちつてのが無いから。頑張れば魔力も伸びると思うよ。」

そして、さっき覗いてたのとは違う台帳みたいなものを取り出した。

「さて、それでは旅先を決めてもらいます。最初の世界、どこにする？」

最初の・・・てことは、いくつかは回らにゃなんのか・・・そりゃそうか、200億の魂なんて、そうでもしなきゃ集められん。

「あ。ホラこれは？ドラゴンボール！」

「却下だ！」

「即答！？また即答！？」

「当たり前だろうが！ンなモン、死亡フラグ満載じゃねーか！！上手いこと回避しまくっても、最後にゃ地球ごとドッカンだろうが！死ぬわ！！」

よくよく考えると、アレって登場人物で一度も死んでないの、ミスターサタンぐらいじゃね？悟飯も最後の最後で吹っ飛んだし。デンドはナメック星で死んでるし。

「でーもー。言ったでしよ、君は一応神サマなの！肉体的なスペックはあるの！」

「嘘付け！ドラゴンボールの世界じゃ神サマの力なんて軽くあしらわれてるじゃねーか！」

「一緒にしないでよ！言ったでしよ、アイツらは地方公務員で僕は国家公務員なの！格が違うの！君だって一応こっち側なんだからー！」

「語尾を伸ばすんじゃないええ！」

睨み合いの結果、ある方法で俺が勝った。

軽男は再び台帳を捲り始める。右の目が腫れ上がってるから読みにくそうだ。

え？何で右目が腫れてるのかって？それは、まあ・・・睨み合いの結果だ。

「死人がたくさん出る方が、君だって早くノルマ達成できるのに。じゃあコレ、ツバサ！適度に死人も出るし！」

「オイ、それって・・・『死者は生き返らない』てのが大前提だろ？俺矛盾しねえか？」

っていうか、適度な死人って何だよ。

「だいじょーぶ！君は蘇生じゃなくて転生だから！」

「詭弁だ・・・」

「何とでも。事実だもん。」

「・・・今は、止めとく。少なくとも、その詭弁を受け入れられるぐらい図太くなるまでは。」

「これ以上図太くなる気？・・・じゃあ」

「ちよつと待て、何だってそこから選ぶ？別にその辺の平和な世界でいいだろうが。」

トリップに興味が無いわけじゃない。むしろ好きだ。

でも、本当に行ったりしたらきつと、好奇心を押さえられない。首を突っ込みまくって死亡フラグ立ちまくりだ。

「え、普通の世界がいいの！？」

コラ軽男、何だってそこまで驚愕する？

可笑しくないだろ、どんなに平和な世界でも人は死ぬんだし。それこそ時間があるなら、どんだけかけたって別にいいじゃん。

「じゃあ何のための魔法なの？」

「人生をより豊かにするためだ！」

「・・・具体的には？」

「その辺の他人があくせくしてる中、悠々自適にぐうたらに過ごすとか。」

「……………君、いい性格してるよね。」

失敬な。誰でも考えることだろうが。

「とにかく、君が行く世界は基本、この台帳に書かれている世界だよ。そういう決まりなんだ。特例は、本部からの依頼があったときだけ。あ、本部って僕らのことね。ちなみにこの台帳に書かれた世界は、生前の君の本棚にあった世界たちだから。」

言われ、俺は台帳をひったくった。

コナン、犬夜叉、ハリポタ……確かにその通りだ。

「……理由を聞いても？」

「いや、あの……好きなんだろうなって……思って……。」
確かに、好きだ。好きだけど！

不穏な空気に気付いたのか、軽男は腰が引けている。

「それで？」

「ごめんなさい考えるのが面倒だったんですまあいいやって思っちゃったんです反省してますだからメンチ切らないで下さいお願いしますす！！」

久々だな、このパターン。

結局、『丁重な』相談の結果、俺の初トリップ先はダイの大冒険に決定した。

「さて、じゃあ最後に注意事項です……。」

両目を腫らした軽男は、ちよつと視界が悪そうだ。え？腫れてたのは右目だけじゃないのかって？それは、まあ……『丁重に』……ね？

「主な死神業務は魂の回収ですが、そのために本来の寿命が尽きてないモノを殺すことはできません。『門』は、その死神が殺したモノを通さないようになってます。」

まあ、そうでないとノルマ達成のために世界を滅ぼすようなヤツも出ちまうかもだしな。

「逆に、本来の寿命よりも長生きさせた場合・・・死亡フラグを折るとか、怪我や病気を治すとか・・・の場合は、予約扱いになります。死んだ後は君のノルマに組み込まれます。」

なるほど、流石腐っても神、救済システムがあるのね。

「なお、君の担当は人間だけど、人間以外の生物の魂を送ることも出来ます。ただし、ノルマには組み込まれません。」

つまりは、本人次第か。

「それから、神ですのて下僕・・・言うなれば眷属を得ることが出来ます。この辺の詳しい説明は、あとでG Padで確認してね。」
G Pad・・・出番あるんだな。

「死神固有のものとして、3つの特殊能力が与えられます。1つ目は魂を見る力。君に解りやすく言えば、霊視能力かな？2つ目は寿命を見る力。対象がいつ何歳で死ぬのかが解っちゃいます。3つ目は、死んだモノに作用する力。対象がいつどんな時にどうやって何歳で死んだかというような、色んな情報を得られます。ただし、コレに関しては任意の能力なので、自分の意思で能力をシャットアウトしておくことも可能です。」

1つ目・3つ目はともかく、2つ目は・・・DEATH NOT Eの死神の目か？いや、そりゃあ俺も死神には違いないんだろうけど。

「死神固有の能力ではなく、神サマ全体的特徴がいくつかあります。まず、さっきも言ったけど、不老です。君ならその15歳の姿のままってことだね。明確な寿命もありません。老いることもなければ病に罹ることもありません。怪我にだけ注意してください。まあでも、これもさっき言ったとおり、神の肉体はとっても頑丈です。車と衝突したとか学校の屋上から飛び降りたとか、そんなぐらいじゃビクともしません。あ、ついでに言うと、神サマの呼吸は特殊だから、水の中でも宇宙空間でもへっちゃらだよ。」

・・・なんか、割と早く『もう自分は人間じゃない』って思い知ることになりそうだな・・・。

「後もう1つ、神サマには生殖能力がありません。ぶっちゃて言うと、子供が出来ません。それに伴う現象・・・露骨な話、射精や生理といったモノもありません。」

それは・・・子供が欲しかったヤツにとっては嫌だろうな。俺は別に構わんが。

「ええと、それから・・・これくらいかなあ？あと気になることがあった場合は、その都度GPadで確認してね？そして、これらのことを承認してくれるなら、首飾を架けて下さい。それで君は完全に神サマになります。」

言われ、俺は首飾を架けた・・・瞬間、何かがストンと落ち着いた。首飾・・・というか、宝石の力の使い方が何となく頭に入ってきたのだ。

試しに、右手のGPadを意識してみる。すると、赤い宝石が一瞬光り、GPadが掻き消えた。収納されたらしい。

「大丈夫そうだね。」

軽男も満足気だ。でも、正直コイツに褒められても嬉しくない。

「じゃあ、早速、いつてらっしゃい。」

軽男が手を振ると、白の空間にパツクリとした裂け目が現れた。ここから行けばいいんだろう。

「んじゃあな。」

俺はピョンと、その世界に飛び込んだ。ダイの大冒険の世界へと。

1 俺、死神になりました（後書き）

長くなりました・・・でも、1話で纏めたかったです。
感想・評価など頂けると嬉しいです。

オマケ1 セルフCMをやってみる (by 筆者) (前書き)

今回は、短い上に読まなくても今後まっつっつっつたぐ問題なお遊びです。

オマケ1 セルフCMをやってみる（by 筆者）

それは俺と軽男が台帳を覗き込んで行く世界を相談していた時のこと。

「オイ、これは何だ？」

俺が指し示したのは『宝玉列伝 ㄱ琳悠国史』という世界だった。

「こんなの、持ってないぞ？」

っていうか、聞いたことも無い。

「あ、それ？それは最高神サマの指示で死神台帳全部に入れられてるヤツなんだよ。」

「へえ・・・どんな世界？」

「何でも、異世界魔法ファンタジーなんだって。『小説家になろう』にて連載中とか。でも本来は『宝玉本記』ってやつのスピンオフのつもりで考えられてたんだって。」

「・・・『宝玉本記』なんて、見当たらないが？」

「そりゃあ、まだ書いてないらしいから。」

「何だそりゃ。その作品の筆者には計画性ってモンが無いのか・・・ムフっ!？」

軽男が、がたがた震えながら俺の口を押さえた。

「それはダメだ、思っても言っちゃダメだよ、でないと僕ら、抹消されちゃうよ!？」

どーゆー意味だそれは。

「『宝玉列伝 ㄱ琳悠国史』は、ある男の人生を記した壮大な伝記!・・・になる予定。幾多の試練を仲間と共に乗り越え、強く生きていく様を大長編でお送りする!・・・つもりらしい。例え何年掛かろうとも必ず完結させる!・・・といいなあ、って筆者は

言ってた。」

予定とかつもりとか、コイツは何にそんなに怯えてるんだ？
ジト目で見ると、軽男は慌てたように弁明しだした。

「だって、筆者がコレを完結させられなかったら・・・筆者は作品を完成させられないヤツってことだよ！？つまりは僕らも途中で止められてしまうかも・・・！！」

戦慄を感じているのか、軽男は未だに震えている。その様はいっそ哀れだ。哀れだが・・・。

うん、やっぱり訳が解らん。

俺はとにかく、その手を外せという意味を込めた拳を、顔面に叩き込んでやった。

オマケ1 セルフCMをやってみる（by 筆者）（後書き）

かくして、軽男はパンダ顔になった、と。

・・・どうでもいい話ですね。ちなみに『宝玉列伝』（琳悠国史

）は、私、深山 雅が書いてるオリジナル小説です。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

2 新たな世界につきました(前書き)

原作はまだ影も形も出てきません。

2 新たな世界につきました

白の空間から抜けた俺は、森の中にいた。

森とはいっても、密林ってほどじゃない。多少は開けている。

そして目下、問題がある。

目の前にモンスターがいるんだな、これが。

それがスライムとかだってんなら、わー流石ドラクエーダイ大だ
けどー、で済んだ。

でも、そんな可愛らしいモンじゃない。

でかい。身の丈は3メートル以上ありそうだし、やたらとぶつと
い。しかも片手に巨大棍棒。

トロールだ。

あれ？トロールはハリポタだっけ？ドラクエだとトロル？ああ、
まあ、どっちでもいいや。

体が薄緑いから、ボストロルだろう。

よかったー、トロルキングやダークトロルじゃなくて・・・って
言ってる場合じゃねえよ。

あの軽男め、よりによってモンスターの目の前に道を繋げやがっ
て！

これはあれか、殴ったり蹴ったりしたことへの逆恨みによる嫌が
らせか！？

とか考えてる間に、ボストロルは横なぎに棍棒でぶん殴ってきや
がった！？

「うわ！？」

トロルが鈍いとはいっても、流石にこの距離では避けられなくて、
咄嗟に腕で身を庇うのが精一杯だった。

勿論そんな程度じゃ勢いを殺すことなど出来ず、木々を薙ぎ倒しながら吹っ飛ばされてしまう。

「痛・・・く、ない？」

5、6本の木を倒してやっと止まったが、思ったよりも痛みが無いのに驚く。

流石にダメージ0ってわけじゃない。ちょっと息が詰ったような感覚はあるし、ぶつかった所に違和感はある。けど、痛いってほどじゃない。

あんなのに思い切り殴られれば、間違いなく体はグチャグチャのスプラッターになりそうなモンなのに。

そういえば軽男、俺の肉体はもう神仕様だから丈夫になってるって。

・・・って、なりすぎだろ！？ボストロルにぶん殴られてダメージごく僅かって、何だよ！？

ああ、ほら、知能なんて殆ど無いはずのボストロルまで目を見開いておどろいてるよ。

でも、勢いを殺しきれなかったことを考えると、腕力は生前と大差ないみたいだな。

となると、脚力もそうだろう。トロルは鈍くても歩幅はありそうだから、走って逃げるのはキツイな。かといって、戦うには俺は経験値不足。

となると、アレかな、やっぱ。

「あゝらよっと。」

ピョンと地を蹴り、俺は宙に浮かび上がった。

よし、トベルーラ成功！！

フフン、いかに巨大なトロルでも、手や棍棒も届かないほどの上空には手出しできまい！

てか俺、飛んでるよ！？人類の夢、自由飛行だぞ！？よっしゃあ！

「じゃーなー、バツハハイー！」

飛行に成功してちよっとハイになってた俺は、ちよっと古い捨て

台詞とともにその場を後にしたのだった。

しばらく飛んでいると、やがて身を隠すのに丁度よさそうな洞穴を見つけた。

取りあえずそこで落ち着こうと思って降りてみたが、着地に失敗してこけた。要練習だな。

入ってみると、洞穴の中は大きなモンスターが入るのには入り口が狭く、けれど中は広々としていた。一時的な隠れ家としては最適だ。

そもそも俺がトリップ先にダイの大冒険を選んだのは、経験値を付けるためだ。

生前の俺が色んなジャンルの漫画だの小説だのを集めていたからか、台帳には、思いつきり野次馬っても死亡フラグは立たなさそうなのもあった。

けど俺としては、出来るだけ早めに最低限のスキルや戦闘力を身に付けておきたかったから、敢えてこの世界を選んだ。

まあ、放つといってもダイがバーン倒して世界守ってくれるし？上手いこと逃げれば何とかなるだろ。俺はとにかく、その辺のモンスターや小悪党と戦いながらちまちま実戦経験を積み、魔法の感覚だとか戦闘技術だとかを覚えたい。あ、あと、サバイバル技術とかもね。だって俺、今、文無しだし。

そしてその合い間を縫って、ダイたちアバンの使徒等を存分に野次馬るんだ！

さて、改めて今の格好を見てみると・・・うん、無理あるな。シャツに短パン、スニーカー。多分、死んだその瞬間の装いなんだろう。

現代日本ならごく普通の、地味めの私服姿だけど、ダイ大、即ちドラクエというファンタジー世界では違和感がある。いや、違和感

しかない。

かといって文無しじゃあ、服も買えない。ダイ大では、ゲームのドラクエのようにはいかないはずだ。要するに、モンスターを倒したってGが降って沸いてくるわけじゃねーってこった。

ちよつと困った。

・・・ああ、あれで何とかなるかな？

軽男が俺にオマケだと言って渡したアレ、GPad。わざわざ渡してきたぐらいだし、こんな時に役立って貰わないとな。

とはいえ・・・あの軽男が寄越したモンだ。あんまり期待はしてねえけど。

俺は右手を差し出し、少し念じてみる。

すると、赤い宝石・・・略して赤石が少し光って、iPad・・・じゃねえ、GPadが一瞬で現れた。うん、案外便利だなコレ。

タッチパネルで操作するからか、電源スイッチ以外にボタンの類は見当たらない。

今更だけど、これって充電とか電池交換とかしなきゃなんのか？
まあいいや、今はこれしか方法無いし。ポチツとな。
そしたら。

『ハァーイ、こんにちわ！初めてのお客様ですね？』

急に幼女の声がした。いや、言い方が悪かったか。小さな女の子のような甲高い声が響いた。GPadから。

『あれ？どうしたんですか？ひょつとして、私に音声ガイドが付いてるってこと、知らないの？』

聞いてねえよ！初耳だよ！

『まあ、でも今知りましたからいいですよね？初めまして、私はGPadのサンちゃんです！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・GPadには、個別の名前があるのか？」

『ありまゝす！』

別にGPadに名前があるが無かろうがどうでもいいが、何だろう、何だかコイツのノリ、あの軽男に似ているような・・・まあ、

アイツと違って声が小さな女の子だからだろうか、そこまで腹は立たないけど。

てか、この声どこから出てんだ？ スピーカーとか見当たらないぞ？

『それでは御主人様、あなたの名前を教えてください！』

どうでもいいが、この幼げな声と『御主人様』の呼びかけに、メイドを思い出した。それも女中としてのメイドではなく、喫茶店とかにいなそうなメイドの方だ。

「識沢秋。」

『シュウさまですね？ インプットしました。今後、私ことサンちゃん、シュウさま専用のG P a dとなります。あなたは・・・円形のトップに五紘星の紋章、中央に黒い石。新米死神ですね？ ノルマ達成まで、一緒に頑張りましょう！』

「おい待て、この首飾のトップでそこまで解るのか？」

『はい、解ります。それは神の身分証明書のようなモノですから。

』

知らなかった・・・てことはつまり、役職ごとにこれは違うのか。

『トップが円形なら魂管理局、五紘星は死神の印、黒い石は新米の証！ 早くノルマを達成して、新米の証である黒い石から一人前の証である透明な石になれるよう、一緒に頑張りましょうね！ 全力でサポートさせて頂きます！』

「・・・おー。」

何と言っているのやら。

死神は魂管理局ってこの管轄なのかよ、とか。

透明な石ってそこは色じゃねえのかよ、とか。

全力でサポートって、何をする気なんだよ、とか。

ツツコミ所は多々あったが、今ここでそれに言及しても疲れるだけの気がしたから、合いの手だけ入れておいた。

『さて、まずは何からなさいますか？』

「・・・・・・とりあえず、お前に充電の類が必要なの

かを教えてくれ。」

結局、G P a dは充電の必要は無いらしい。永久バッテリーなんだと。

『私は最新式ですからね。しかも軽い上にコンパクトですし。昔は、もっと大きな上に折り畳み式で、文字入力にもキーボードを使わなきゃいけなかったG P Cとか使ってたみたいですよ？簡易式のでは最近、立体映像も映し出せる3 G Sなんてものあるんですけどね。』

それは・・・明らかに、ノートパソコンや3 D Sのパクリなんだろうな・・・と、ちよつと頭が痛くなった。

ちなみに、GはやっぱりG O DのGなんだそう。

2 新たな世界につきました（後書き）

どうやらG P a dは喋るようです。

音声機能は元々考えてたものですが、名前を付けたのは急に決めたことです。一々G P a dって呼ぶのが（書くのが）面倒だったんですよ……。

今後数回は、原作に入らず神様事情解説に費やすことになりそうです。よかったら付き合ってやって下さい。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

3 G P a d取扱説明書（前書き）

サブタイトル通り、G P a dことサンの機能についてです。
原作は全然出てきません。

3 G Pad取扱説明書

『それでは、アプリを表示しますね。』

G Pad改め、サンちゃんことサンのモニターには、幾つかのアプリが並んだ。

『何か新しいアプリが欲しい時は、この』

1番左上のアプリが選択された・・・サンの意思(?)で。

『GISに接続してダウンロードしてくださいね。ちなみにGISは、神様情報サービスの略です。』

まんまインターネットサービスだよな・・・それって。

サンは止まらず、次々説明していく。

『本部より個人的な通達がきたり、知り合いと私的なやり取りをするときには、このGメールをご利用下さいね。直接会話が必要な時は、こちらのG poneですね。相手を映し出すことも出来るんです。』G Padだけではなく、GPCや3GS、その他情報端末でもこれらはご利用できます!』

そういえば軽男も、メールするとかメールしてねとか言ってたっけ。

てか、G phoneって・・・テレビ電話?

『何か事件や騒動、その他ゴシップが発見された場合、こちらのGNに随時更新されます。これはご自分で好きなときに確認して下さいね?強制じゃありませんからしなくても問題はありませんが、情報や流行に乗り遅れちゃうと後で後悔しちゃいますよ?』

「・・・ちなみに、GNってのは・・・」

『神様ニュースの略です。』

やっぱりか!

『こちらが、GLF。細々とした色々なツールをご利用いただけます。時計は、その時にいる世界の時間を示すものと神様世界の時

間を示すもの、2種類をご用意しています。アラームも内蔵してま
すから、目覚ましとしても役立ちます！他、カメラ、ムービー、メ
モ帳、スケジュールに電卓・・・」

「GLKってのは、神様ライフキットの略か？」

『その通りです！流石シュウ様！！』

サンは感激したような声を出したが・・・解らいでか。パターン
が読めてきた。携帯かお前は。

『こっちでは、色んな音楽がダウンロードできまゝす。名前は』

「GPodか？」

『せゝかゝい！やっぱりシュウ様、スゴイです！』

いや、感動してるトコ悪いけど、それもiPodのパクリだろ？

『コレは、GM。色んな映像を保存しておけます。GMってのは』

「神様メモリーの略？」

『惜しい！神様メモリーズです。次は頑張ってください！』

いや、別にクイズじゃねえし。てか、果てしなくどうでもいいよ、
その違い。

何だか段々疲れてきた・・・。

『こちらは、GDになります。神様データの略です。』

「神様データ？」

それは予測がつかない。ちょっと興味が引かれた。

『正確には、シュウ様個人のデータを見ることができます。・・・
ちよつと試してみましようか。』

ピッ、という電子音のあと、表のような画面が出て来た。

＜識沢 秋（シキサワ シュウ）・・・外見年齢 15歳
魂管理局所属・・・死神（担当・人間）＞

今日のノルマ達成数・・・0

本日の送魂数	..	0
本日の予約数	..	0
今日のノルマ達成数	..	0
今日の送魂数	..	0
今日の予約数	..	0
総ノルマ達成数	..	0
総送魂数	..	0
送予約数	..	0
ノルマ残高	..	20,000,000,000

『これが、ノルマデータ。シュウ様の場合、まだ1つも魂を送ってませんから、残高は丸々残ってますね・・・って、200億！？マジですか！？』

ハイ、マジです。

『ふへえ・・・と、とにかく、ノルマ達成数はシュウ様を送った担当魂の数です。ええっと、担当は人間ですか。送魂数は、それ以外の存在として死んだモノの魂を送った時にカウントされます。予約については知ってますね？ノルマ残高は、ノルマー（総ノルマ達成数＋総予約数）です。ノルマ残高が0になった時、それがシュウ様の任期満了時になります。』

ったく・・・いつになることやら。

『もうちょっとググれば、昨日・今週・先週など、更に詳しい履歴を見ることが出来ますよ。それから、メアド帳と電話帳もここにあります。表示してみます？』

「登録があんのか？」

『1件ずつあります。どちらも・・・同じ人、いえ神のようです』

ね。』

ええ、俺まだ知り合いなんて・・・いた、1柱だけ。

「じゃあ電話。そこに掛けられるか？」

『お任せください!』

初仕事に張り切ってるのか、サンの声は弾んでいた。

2、3回のコールの後、テレビ電話・・・否、G p h o n eに出たのは、やはりあの軽男だった。

『やあやあ、早速だn』

ブチッ!

俺は画面右下に出ていた通話オフボタン(?)を即効で押した。

あんなヤツ、顔なんて見たくねえよ!

てか、何だよ、このアドレス。 k a m i s a m a . g o m . . .
神様ドットゴムって・・・神はアイツだけじゃねーだろうに、ダブ
ったりしないのか?

『シウ様あ、何で途中で切っちゃうんですかあ?』

サンは不満げだ。もし顔があったら、唇を尖らせてるだろう。

「いいか、アイツから連絡が来ても出来るだけ繋ぐな。」

『・・・・・・はあい、解りました。』

よしよし、従順でよろしい。

『このGQっていうのは、神様クエストです。』

「・・・今度はドラクエのパクリか?」

しかも何だ、『挑戦者求ム!』とか『薬を譲ってください』とか。
『あ、クエストを馬鹿にしちゃいけないですよ? 結構役に立
つんですよ? 困った時に助けてもらったり、いざってときに仕事を
請けて小金を稼いだり。重宝しますよ? 死神、特に新米だとすっ
ごい安月給ですし。』

待て、今何か聞き捨てならないこと言わなかったか、コイツ。

『ええーっと、次からは生活に直結するアプリに入りますね。ま

ず、お買い物ならコチラ、Gshopをご利用下さい。』

「shop・・・店？」

『ハイ、そうです。こちらは神世界の最大手百貨店『Gデパート』の通販ページになってます。ゆりかごから墓場までをキャッチフレーズに、大抵のモノが手に入っちゃいます！・・・お金さえあれば。検索だってできちゃうんですよ？例えば・・・『ドラクエ』で検索を掛けてみてください。あ、音声入力でもタッチパネルでもどっちでもいいですよ？』

俺としてはタッチパネルの方が馴染みがあるから、直接指を使って入力する。

ドラクエ、と打って検索してみると、色んな項目が出てきた。

武器・防具・装備品・薬・その他の5項目だ。

更に武器を選択してみると、今度は更に剣・やりなどの項目が出てくる。

試しに剣を選んでみると、商品画面が表示された。

商品名・値段・在庫数と共に、その品の写真まで付いている。

まじまじと見ていると、ピロリンという音と共に『はがねのつるぎ』が光り、在庫数が5から4に減る。

『あ、今度どこかで誰かが鋼の剣を買ったみたいですね。在庫が減りましたでしょ？これを買うと、首飾の赤い宝石を経由して収納空間に来るんですよ。ちなみに買い方は簡単！！欲しい商品を選んで、買い物カゴに入れるを入力、買い物すべて終了した後、会計ボタンを押すだけ！会計ボタンを押すまでは、買い物カゴの商品も返却可能ですけど、買った後の返品は不良品以外受け付けないので気を付けて下さい。あ、ホラ見て下さい！』

再びピロリンという音とともに、今度は『どうのつるぎ』が光った。ただし、在庫が13から14に増えたのがさっきと違うところだ。

『買い物だけでなく、売却も可能ですよ。平たく言えば、リサイクルですね。』

・・・・・・便利な、コレ。

『ちなみに、画面左上が、シュウ様のお財布の中身になってます。』

何、俺は文無しだぞ・・・と思ったら、何と『720,000G』と表示された。

何故だ？

「てか、Gって・・・」

『神世界の通貨単位です。』

え、神世界もGゴールドなのか！？・・・いや、待て、これまでのパターンだと。

「GはGODのGか？」

『はい、そうです。』

やっぱりか！！どんだけG好きなんだよ、神世界！

「いや待て、それは後だ。それより、何で俺に金がある？」

『どうやら、シュウ様の生前の財産が持ち越されたようです。千円以下は切り捨てらしいですけど。72万ですか、普通の高校生だったにしては結構持ってたんですね。』

そりゃ、小学生の頃からのお年玉とか、高校入学祝とかを殆ど貯金してたからな。

「てか、Gって日本円と同じレートなのかよ・・・。」

『それについてはこの後、GBの説明時に詳しくお伝えします！』

「GBってのは・・・」

『神様銀行の略です！』

ああ・・・神様銀行（GOD BANK）ね・・・。

『一緒に、死神の給与体制についても説明しますからね！』

そう、問題はそこだ！

安月給って、どういう意味だよ！

3 G P a d取扱説明書（後書き）

ここで、次回に続きます。次回もこんな感じです。ちょいちょい小ネタを挟みながら解説していきます。

そしてG P a d、中々の便利グッズです。

感想、評価など頂けると嬉しいです。

4 新米死神は安月給？（前書き）

またも、サブタイトル通りの内容です。

あと、ドラクエの通貨もG、神世界の通貨もGだと解りにくいので、ドラクエでの通貨をゴールド、神世界の通貨をGと表記します。

また、レートは筆者が適当に付けたものであって、公式ではありません。

4 新米死神は安月給？

『こちらがGBページになりま〜す！』

現れたのは、＜神様銀行へようこそ！＞とカラフルに書かれた入り口ページだった。

・・・・チャチなページ・・・。

『まずはレートをご確認下さいな。』

そうして出てくるのは折れ線グラフ。

「・・・大事なところだけまとめて説明してくれ。」
ぶっちゃけ、こういうの見る気分じゃない。

『現在、1Gに対して日本円は1円となっています。』
一気に結論までいったなオイ。

「にしても、すごい偶然だな・・・」

1円⇕1Gって・・・。

『いいえ、これは偶然ではなく、必然です。』

サンが真面目くさった声を出した。

てか、どっかで聞いたようなセリフだな。・・・あ、CLAMP
作品でよく聞く。

「何でコレが必然なんだ？」

『詳細は話せませんが・・・筆者の都合というヤツです。』

・・・そういや、軽男も似たようなこと言ってたっけ。でもどう
いうことなんだ？

『ちなみに、この世界の通貨であるゴールドの価値は10Gです
！！』

あ、話を逸らしやがった。

てか、10Gが1ゴールド？ということは、10円で1ゴールド
？それって安いのか？高いのか？

『知ってるかもしれませんが、首飾をかけた時点で神様になりま

す。それと同時に、GBに個人口座が作られ、お給料はそこに振り込まれます。』

「安月給って言ってたよな？それは・・・死神が月給制なのか？それとも、神は全員月給制なのか？」

『神様全部がそうですよ？ちなみに、1番の高給取りは最高神様です！』

え、最高神もって・・・誰が払ってんだよ、ソレ。

てか、月給制なの？神様って月給制で働いてんの！？マジで！？

『死神なら、基本給＋歩合制になりますね。新米死神の基本給は、月8万Gです。』

安っ！てか、安っ！8万Gって、つまり8万円だろ！？バイト代かよ！

ドラクエでは1ゴールドで10円だから・・・8,000ゴールド？

『ボーナスは年2回。基本給の1.5倍ですから・・・基本給だけなら、新米死神の年収は120万Gですねえ。』

「・・・・・・・・生活成り立つのか、ソレって。」

いや、無理だろ。よっぽど切り詰めりゃあ可能かもしれんが、そもそも俺の場合は宿無しだ。ずっと野宿しろってことか？

『だから、みんな頑張って歩合を上げたり、クエストをこなしたり、手に入れた物品を売ったりしてるんですう。それに、必要経費なら領収書を切れますし！』

領収書・・・あんまファンタジー世界で聞きたくない単語だ・・・。

「歩合はどうやって上げるんだ？」

その結果如何によっては、待遇改善を訴えるデモを起こしてやる。

『ええーっと・・・』

サンはまた別のページを開いた。何かの一覧表らしい。

『やっぱり、多くの魂を集めることですね。ノルマ対象の魂1つにつき、100G。ノルマ対象外なら、50G。予約なら、1件に

つき200Gとなってます。』

ああ・・・それでさっきのGDページで、＜今月の＞って項目が真っ先に出てたのか。アレで、歩合がいくら貰えるのか解るってワケだ。

そして、予約の方が高い・・・つまり、人助けがお金になるというわけで・・・セコッ！

『他、本部からの指令をこなせば、特別手当も貰えちゃいます！結果、新米死神のみなさんの手取りは月15～20万Gぐらいになるみたいです。あ、あと、新米死神は神様の中で最も安月給なので、所得税は免除されてます。』

あ、税金ってあるのね・・・。

何かもうツツコむのも面倒で、取りあえず聞いてみることにした。
『所得税』は・・・ってこたあ、払わなきゃならん税もあるのか？』

『ハイ、ございます！流石シウ様、察しがいいです！』
いや、おだてなくていいから先を頼む。

『まず、消費税。これは税率5%になってますが、買い物の代金に既に含まれてます。あとは、住民税。新米死神だと・・・年2万Gになってますね。』

うわ・・・ってか、その消費税・・・。

『消費税が5%なのも、筆者の都合ってヤツか？』

『そ、そうです・・・シウ様、お願いですからあまりそれを口にしないで下さい・・・』

なら、近い将来、8%、さらに10%に上がるかもな・・・に、しても。

何だか、サンの声が震えてた。何故だ。

『で、では、気を取り直して・・・1ヶ月の間に1つの魂も送らず、1件の予約も取れなかった場合は、1万Gの罰金対象になります。なので、身動きが取れなくなったですか、そもそも彷徨う魂が無い場所に長期的に留まることになりましたとか、そういう場合

はちゃんと事前に申請しておいてください。罰金が3連続した場合、又は罰金が10回溜まった場合には忠告対象となり、忠告を5回受けたら首飾を没収されます。事実上の神資格剥奪ですね。』

運転免許かよ・・・と、心の中でだけツツコんでおく。

「首飾を没収されたら、どうなるんだ？」

『魂消滅です。』

即答だな、オイ。

ってか、それ嫌すぎる・・・やっぱ早まったかな、死神になるの。

『あと、基本給ですが、ランクが上がれば基本給も上がります。』
「ランク？」

『ハイ！ノルマの1割の魂を送るごとに1ランク上がり、最高が10ランク。つまり任期満了です。任期満了となってもそのまま10ランクの死神として活動を続ける方もいらっしゃいます。ちなみに、1ランク上がるごとに基本給は2万G上がります。所得税を払うのは、5ランクからです。』

つまりは、基本給16万からってことか・・・。

でも、1割って・・・俺の1割は、20億だよな・・・。

『ランクは歩合とも密接な関係がありまして、2ランク上がるごとに単価が上がるんですよ？』

「え？ってことは、死神って、上のランクほど高給取り・・・？」

『ハイ！その分所得税や住民税も上がりますが、10ランクの死神さんの手取りは月50万を超えるみたいですよ？ですから、がんばりましょうねっ！』

「・・・うん・・・がんばる・・・。」

俺はちよつと欲が出て来た。

だって、月50万だよ、50万！！Gは円と同じレートだから、月給50万円以上ってことだぞ！？生前の俺の親父の月収は30万ぐらいだったって聞いたことあるぞ！？

・・・いや、それまでの道のりは遠いけど。

『ランクは、首飾トップ中央の石の色でも解っちゃいます！今は

ランク1の新米なので漆黒ですが、ランクが上がるごとに少しずつ薄くなりまして、ランク10なら完全に透明になりまゝす!』

そういえば、さっきもそんなこと言ってたっけ。

つか、さ。

「さっきから新米・新米って、その言い方何とかならんのか?」
苛立つってほどじゃあないが、何となく気になる。まあ、実際に新米なのは違いないんだから、文句を言えた義理じゃねーけど。けれど、サンは申し訳なさそうに答えた。

『ごめんなさい、シュウ様あ。ランク1の死神は新米と呼ぶのが神世界の通例なんです。』

え、じゃあつまり・・・魂集め及び予約の総数20億人を突破するまで、俺、新米って言われ続けんのか・・・? 今もいいが・・・その内、腹が立ってきそうだな。

4 新米死神は安月給？（後書き）

どうやら、神様の懷事情はかなりシビアみたいです。ちなみに、保険とかそういったモノは無いです。病気もしないし、やたら丈夫なので。

次回、主人公のステータスなどを解説したら、やっと説明回が終わりそうです。

でも、まだ原作には入りませんけどね。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

5 神様の防御力はチートでした（前書き）

今回で間章は終わりです。

・・・長かった。

5 神様の防御力はチートでした

『それでは今後の計画を立てましょう！』

サンはやたら張り切っている。いや、ワクワクしているというのが相応しいかもしれない。

「ああ、それはいいけど・・・ステータスのようなものって、あるか？」

とりあえず、ボストロルに思いっきりぶん殴られてケロリとしている自分の防御力が、ものすごく気になるところだ。

『ございますよう？それはこちら、Gデータページ内にあります！』

「Gデータ？GDじゃなかったのか？」

『あ、それは短縮された表記です。普段の会話などではGデータって言うてるんです。同じように、GBならGバンク、Gshopは・・・そのままですねえ。Gショップです。』

ふうん・・・まあこっちとしても、正直その方が解りやすい。

そんな会話をしてる間に、サンは目的のページを映し出す。

考えてみれば、これってかなり便利だよな。自分で操作しなくてもいいんだから。

出て来たページには、ごく簡単な俺のプロフィールが載っていた。

・名前	...	識沢 秋	<シキサワ シュウ>
・外見年齢	...	15	
・所属	...	魂管理局	
・職種	...	死神	
・ランク	...	1	<新米>

「おい・・・＜新米＞って、わざわざ書いておくようなことか？」
『やだあゝ、シユウ様あ！ 必要ないなら記載なんてしませんよお！』

「・・・・・・・・・・・・（怒）」

『つ、続けますねゝ？』

・ 眷属 .. 0

「これ、何だ？ 眷属？」

『解りやすく言えば、使い魔や式のようなモノです。』

そーいや、軽男もそんなこと言ってたな・・・。

『ちなみに、眷族1体につき年1万Gのお手当が付きます。』

子ども手当てかよ！？

いや、てか、それならすぐにでも捕まえて・・・とか考えてたら、

サンは無情にもこう続けた。

『契約によって眷属に降せますけど・・・ランクによって持てる眷族の数は決まっています。ちなみに、新米死神の眷属上限は0です。』

「・・・・・・・・・・・・」

要するに、持てねーってことか！？ ならこんな項目付けんじゃねえよ！ぬか喜びさせやがって！

そして、ページがまた変わったが・・・。

・ 身長 ..	168 cm
・ 体重 ..	54 kg
・ BMI ..	19.13 (標準)

『背え高い！でも、結構細いんですね？華奢っていうより、細身？』

「・・・まあ、小学校に入る前から空手と柔道で鍛えて、絞ってたからな。もう少し年齢が上がってたら、皮下脂肪も付いてきたのかもしれないが。」

『なるほど、女の体型になってくる前に死んじゃったってワケですわね・・・縦にだけ伸びちゃって・・・そういえば、バストやヒップも小さいですし、ウエストに括れも無いですよわね。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ざっくりいったな、サン。まあ、俺はあんまり気にしねーからいいけど。

ちなみに、俺のバストはA A Aカップだったりする。・・・要するに、ブラはほぼ必要ないってこった。ちよつと厚めのシャツでも着りゃあ解らんくなる。

てか、何でB M Iまで？＜新米＞以上にいらんだろ。

『ここまでがプロフィールになりまーす！お次のページがお待ちかね、ステータスでーす！』

よし、それだ！それが今1番気になってんだよ。

パツと出てきたのは・・・なんかどっかで見たことがあるよーな表だった。

『今回、シュウ様がご滞在になられるのがドラクエベースの世界ということで、ステータス早見表もドラクエ仕様になってまーす！』
あ、やっぱり？通りでどっかで見たと思った。

・HP	..	411
・MP	..	360
・力	..	87
・素早さ	..	73

・ 体力	..	205
・ 賢さ	..	149
・ 運の良さ	..	128
・ 攻撃力	..	106
・ 守備力	..	250

・・・って、高っ！高っ！？防御力高っ！？クロコダインも超えてるぞ！？何も装備とかしてねーのに！

いや、防御力だけじゃなく、HPと体力も高い。

何、このいかにも盾ですと言わんばかりの数値は！？バランス可笑しいだろ！？

でも、他はまあ妥当な数値だろうか。

MPは丁度メラゾーマ20発分だし、力・素早さは一般人としては高い方だが超人というほどでもない。賢さと運の良さは・・・何か微妙だ。これは高いのか、低いのか・・・。

『あゝ、でもやっぱり神様なりたてなだけあって、まだちょっと脆いですね。』

・・・・・・ハア！？！？

「待て！俺、脆いのか！？この守備力でか！？」

『あ、ハイ。脆いです。』

サンはあっさりと返してきた。

『シユウ様のように、神様以外の魂が神様に転生した場合、肉体は神様仕様になってはいても、ベースは生前のモノですから。完全に神様の強度を得られるようになるのは、生前よりも長い時間をその身体で過ごしてからです。シユウ様なら、15年ですね。それまでは徐々に上がっていきます。』

「・・・ちなみに、完全に神肉体になった場合、どれくらいの強度なんだ？」

『ドラクエ風にいうと・・・HP700、体力360、防御力5

00・・・みたいです。勿論、本人・・・いえ、本神の鍛練によつてはより伸ばせますけれど。』

「・・・俺に、並外れたHPを持つメタルスライムになれつての
か・・・？」

今でさえ充分桁外れだつてのに。

例えば、ゲームで考えると。メタスラ系のモンスターは、まともな攻撃では1とか2とか、それぐらいちまちまとしかHPを削れない。それでそのHPも桁外れなら・・・倒せる気がしねえ。

つて・・・アレ？

「でも俺、あの軽男を蹴・・・じゃない、殴・・・じゃない、制裁できたぞ？あいつもそれぐらいの頑丈さあったんじゃないの？一応神なんだし。」

『神様同士なら、その限りではありません。それこそ人間同士と同じです。』

・・・変な理屈。

『つまりですね・・・とっても強くて頑丈で、仲間内では負け知らずなアリでも、人間にはあっさり踏み潰されちゃうでしょ？逆に、とっても弱くて苛められっ子な人間でも、アリの踏み潰すのは一瞬でしょ？それと似たようなモノです。』

要するに・・・スケールが違うってことか？ちよつと違う気がするが。

『シュウ様あ、まだですかあ？』

「ちよつと待てつて・・・。」

現在俺は、Gショップを覗いている。勿論、身なりを整えるためだ。

とりあえず、ドラクエ系統の世界を歩いてても違和感がないような格好にしなくては。

俺のあの防御力なら、さほど装備品の防御力を考える必要はない。どうせ焼け石に水にしかない。色々と見ていると、ゲームなん

かじゃ幻の防具とか呼ばれているようなのもあったし、そういうのなら俺の防御力でも生かせただろうが、それらは総じて高かった。所持金には限りがあるしな。

だとしたら、そう、防御力よりも素早さ、身かわし率・・・あとは、魔法防御を考えた方がいい。けれど、だからといってあまりにも脆い服も困る。服は滅茶苦茶になってんのに本人は無傷だなんて、怪しすぎるからな。その匙加減が難しい。

「むー・・・」

『いっそ、ドラクエとは別世界の服も見てみます？』

「・・・そうだな、そうするか・・・」

しばらくして、俺の装備は完了した。

結局、服は隠れ身の服を選んだ。これだったら中にもう1枚薄いのを着られそうだったからだ。

中には、別世界の品である、防刃素材で出来た薄い長袖シャツ。色は黒で、ズボンも同じ材質のモノを。

靴は安全靴。丈夫そうだったし、見かわし率もアップするからだ。完全靴なんかもあったけど、それは高くて手が出なかった。

後、冬の防寒具としても使えそうだから幻魔の法衣も買っておい。これは赤石に収納してある。

服以外では、装備品として星降る腕輪。素早さがかなり上がる。これは利き腕じゃない左に装備。盾は持たない。俺は元々の防御力が高いし、単に動きにくくなってしまっただけの可能性もあるからだ。それと道具だが、薬草の類は買わず、魔法の聖水を買った。MPが尽きなきゃなんとか出来るだろうと思ったからだ。・・・賢者の聖水は、高くて買えなかった。

一応、護身用として聖なるナイフも買っておい。力はある限り伸びてないようだったからな。

・・・これぐらいだろうか。改めて見てみると、中々の出費だった。でもその甲斐あって、俺の見た目はドラクエ世界をうろつい

とても違和感無いぐらいにはなった。

『それではシュウ様！準備はいいですね！』

「あー、まあ、一応な。」

『それじゃあ、後は実践あるのみです！レッツらゴー！！』

やたらとハイテンションだが、サン？

お前やつぱり、ちょいちょい古いぞ？

5 神様の防御力はチートでした（後書き）

主人公の体型とステータス、これでも真面目に考えました。

でも防御力チートの設定は元々あったので、酷くバランスが悪く・

主人公の体型は、少女としてはかなりの長身ですが、出るトコは出てない設定です。傍目には、長身の少女というよりも細身の少年。

いっそ主人公、本当に男の子でもよかったんじゃない？とも一瞬思っただんですが、やっぱり女の子。

理由は簡単、筆者が俺っ娘・僕っ娘好きだからです！（キッパリ）ちなみに、男の娘も好きです。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

オマケ2 取りあえず、次にヤツと会うことがあったら5・6発ぶん殴ろう(普

新章に行く前に、ちょっと小ネタがあるのでオマケってみます。

オマケ2 取りあえず、次にヤツと会うことがあったら5・6発ぶん殴ろう

それは、俺が装備を整え終えた直後の出来事。

『シュウ様あゝ。助けてくださいいゝ。』

「? 何からだ?」

今にも泣き出しそうなサンに、俺は首を捻る。特に問題は無いはずだが。

『さっきからずっと、電話が掛かってきてるんですうゝ! あの着信拒否してる方からあ! その前にもメールが延々来てますし・・・もう鬱陶しくてしょーがないですっ!』

軽男オ(怒)・・・。

「ちなみに、メールはどんだけ来てるんだ?」

『もう100件ぐらいになりますよお(泣)。』

・・・・・・。仕方が無い、出るか。サンが本当に哀切極まってるような声を出すし。

「繋いでくれ。」

頼むと、一瞬で画面が切り替わった。

『ちよおつとおゝ。早く出てよゝ。』

・・・・うん、やっぱり腹立つな、このツラ。

「黙れや。さっさと済ませ。」

『うわっ、凄まないでよ! 君って、最高神サマに何となく似てるから怖いんだよ。』

知らんがな、そんなこと。ってか、俺、最高神に似てんのか。それでコイツはこんなにも過剰反応するんだな。

『実はね、さっき伝え忘れちゃって。ついでに、渡し忘れたんだ、コレ。』

言って軽男が取り出したのは1枚の書類だった。

『コレはね、死神共済組合の入会申し込み書だよ。』

ほう、共済まであんのか。何でもアリだな、神世界……って、共済？

共済！？

『実はね、これって死神になる子みんなに、首飾と一緒に渡すことになってるんだよね。でも、忘れちゃってさ。ゴメンね？すぐに赤石を通して送るから、必要事項に記入して送り返してね？会費は新米なら年1000Gだから。それはGバンクの口座から引き落としね？そしたら、Gショップでお買い物する時、1割引きになるから、お得なんだよ？他にも色々あるしネ。じゃ、ヨロシクウゥ♪』

言うだけ言うと、軽男はさっさと電話を切った。

………今さっき、そのGショップでの買い物を終えた所だよ！！ or z

俺は文字通り、崩れ落ちた。

1割……1割……。

割引の文字が、大きく脳内を乱舞する。

『………ええっと……シユウ様……？』

「………」

『……取りあえず、あの方の着信拒否を解除しておきましょうか……？』

「………」

俺は、力なく頷いくしかなかった……。

結論。

軽男は、出来れば関わり合いになりたくないが拒否したら拒否つたで後でどんな情報を出してくるか解らんヤツだ。

オマケ2 取りあえず、次にヤツと会うことがあったら5・6発ぶん殴ろう（後

サブタイトルの＜ヤツ＞とは軽男のことです。

死神には共済もあるんです。

そして主人公、どうやら最高神と似てるようです。

これが後々の伏線に！・・・は、なりません。偶々です。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

6 死神初仕事（前書き）

まずは、主人公の初死神仕事。

原作は遠いです。それでもお付き合い頂けたら幸いです。

＊軽いシリアスが入るので、ギャグのみをお望みの方はご注意ください。

6 死神初仕事

人里にまで出るのに、そう時間は掛からなかった。

トベルーラで空を飛べば森を抜けるのもすぐだったし、そこから余り離れていないところに小さな村があったんだ。

これといって特徴は見当たらない、ごくごく長閑な村だった。

まだ日は高いようだったけれど、RPGなら基本は村や町での情報収集。俺としては、現在地もわからないし、今がいつの時代なのかも解らない。

ボストロルに出くわしているのだからドラクエベースの世界にきたのは間違いなし、ダイの大冒険の世界にきたのも、あの台帳には他にドラクエベースとなっている世界がなかったように見えたから、多分間違いない。

けれど、よくよく考えれば、それを取り計らったのはあの軽男だ。どうも嫌な予感がする。……ああ……1割引き……。

村に入ると、村人に物珍しげに見られはしたが、あからさまな敵意や警戒は向けられなかった。よかった、どうやら浮いてはいないらしい。

真っ先に俺に近付いてきたのは、小さな男の子だった。

「お兄ちゃん!!」

俺はお兄ちゃんじゃねーよ……ってツツコミはそもそも、一人称が『俺』な時点で放棄しているからそれはスルーして。

年の頃は5・6歳ぐらいの、小さな子だった。けれど、何やら随分と慌てているらしい。いや、慌てているなんてモンじゃない。今にも泣き出さんばかりに必死だ。

「お兄ちゃん、回復魔法使える!?!」

自己紹介ぐらいしよーぜ、とはとても言えない。その子の様子が、まるで縫り付いてくるかのようだったからだ。

「ああ・・・一応。」

あの軽男に、あらゆる魔法を使えるように、と頼んだ。試してはいないが、多分使えるだろう。魔法力切れも起こしてはいなさそうだし。

そう答えると、男の子はバツと俺の手を掴んで引っ張ろうとした。

「だったら一緒に来て！お父さんが・・・父ちゃんが死にそうなんだ！！」

・・・。。。。。。。。。

うわ、早速ですか？

「落ち着け、サム。ベンさんは・・・もう・・・」

男の子・・・どうやらサムというらしい・・・の肩を引いたのは、50歳ぐらいの男だった。サムは涙を堪えた目でその人を睨み付けた。けれど、サムが何か言う前に男は俺に目礼した。

「すまんね、旅の人。私はこの村の村長で、イルシャという。」

「いえ・・・あ、俺、シュウっていいいます。どうかしたんですか？」

と、聞かざるを得ないこの状況。

「実は・・・」

イルシャさんの話を纏めると、早い話、このサムの父・ベンが死に掛けているらしい。

近頃どうもモンスターが活発化してきていて、この村は森のすぐ近くにあるため、ちょっとした危険ゾーンらしい。・・・って、あの森だよな。さっきまで俺がいた。

しかもここ数日では、これまであの森では見かけたことのなかったポストロールまで現れて・・・って、アイツのことか？

ベンさんはきこりだから、モンスターが出るからって森に入らないわけにはいかない。それでも注意して、奥には入らないようにし

ていたのだが・・・何と、そのポストロルの方がこっちに来てしまったんだと。

ベンさんも必死に逃げたが、とうとう森を抜けた辺りで追いつかれ、棍棒で横なぎに殴られてしまった。幸い・・・とは言い難いが、当たったのはほんの少しだったものの、そこは馬鹿力のポストロル。見事に肋骨が数本折れ、内何本かは肺にまで刺さってしまった。それが昨日の夕方のこと。

・・・って、俺、ものの見事にクリーンヒットしたってのに、今ピンシヤンしてるよなあ・・・やめよう、考えるの。何だか頭が痛くなってきた。

で、そのベンさんは、今のところ何とか息はあるものの、危篤状態。この村でただ1人回復魔法を使える教会の神父も尽力はしたが、ホイミが精一杯の彼では流石にそこまでの重症を治すことは出来ずもういつそ、これ以上苦しまないように安楽死させてあげるべきか・・・との意見も出ていた所に俺が現れた、と。

『シュウ様、チャンスですっ!』

って、サン!? お前赤石に収納してるハズなのに!?

『あ、声を届けることは出来ますよ? 私はシュウ様のためのアイテムですから。ちなみに、シュウ様の心の声も聞こえます!』

あ、そう・・・。

『そんなことよりシュウ様、チャンスです! いくら重症とはいえ、ポストロルに殴られただけなら、ただの怪我! きっとベホマなら治ります!』

あれ、お前ベホマとかそーゆーの知ってんの?

『私を何だと思ってるんですか? 私は最先端の情報端末、GPa dですよ? 見直しました?』

うん、見直した。ごめん、心の底で軽^{かる}娘^{っこ}って思ってた。

『そんなこと思ってたんですか!?!? ・・・とにかく、死神業執行

のチャンスです！言い方は不謹慎ですが、そのベンさんとやはらは、ひよっとしたらもう寿命かもしれません。そんな方を治せば、予約が取れます！』

おお、そうだ！予約！200G！2000円！！

何、不謹慎？お生憎、俺は無償の慈悲なんてまっぴら御免。自分が1番可愛い。

こちらら生活かかってんだぞ？

・・・などという内心は表には出さず。

「事情は解りました。俺は僧侶でも賢者でもありませんが、回復魔法は使えます。一応、見せてもらえませんか？」

と、のたまったのだった。

案内されたのは、丸太で作られた一軒家だった。まさしくきこりの家ってカンジだ。

俺の手を必死で引いていくのはサムで、村長のイルシャさんは渋い顔をしている。

あの子にあまり期待させないで欲しい、とこっさり耳打ちされた。余計傷つくから、と。どうやらベンさんの容態は、それこそ秒読みらしい。旅人が来た、という話を聞いた瞬間、サムは家を飛び出したんだと。藁にも縋る思いってヤツだろう。

ベッドに横たわるのは、サムと同じ茶髪の、30代くらいの男だった。傍に座ってるのはそれと同年代の女性と、10歳くらいの少女。サムの母と姉だ、とイルシャさんが教えてくれた。

泣き腫らした目をしているが、サムとは違ってどこか諦念が見えた。どうやら夫の、父の死をもう覚悟してしまっているらしい。

『シュウ様、この方の寿命、わかります？』

サンに言われ、ちよつと意識を集中してみる。軽男が言っていた、死神第2の能力は確か、寿命を見る力だったはず。

少しだけ目が熱くなったけど、気にする程でもなく、俺はそのま

まぐ見た＞。

するとベンさんの頭上に、数字が2つ見えた。

00..14..27
33

上の数字はまるでデジタル時計のようだ。秒数は1ずつ、減っている。

(これは?)

俺はこっそりと、心の中でサンに訊ねた。

思えば、サンは随分と役に立つ。優秀なガイドだ。

『それが寿命です。上が死ぬ時、下がその時の年齢ですね。通常は上の段も暦で出ますけど、24時間を切った場合はこうやってカウントされちゃいます。』

なるほど。つまりこの人は、放っておけばあと14分で死んで、

享年は33になる、と。

『やっぱり寿命みたいですな。シュウ様、あまり時間はありません。早く治しちゃいましょう?』

言われずとも。

「ちよつといいですか?」

取りあえず力はシャットダウンして・・・でないと、他の人たちの寿命も見えてしまうから・・・俺はベッドの脇に蹲る女の人に声を掛けた。女性は、どこか焦点のあつて無い目で俺を見、サムが回復魔法を使える人だ、と言うと緩慢な動作で少し離れた。けれど、あまり期待はしていないように見える。

患者をまじまじと見て、それはそうかもしれない、と俺も思う。その顔には血の気がなく、真っ白だった。否、それよりも。

話ではこのベンさんは、肺をやられている、と聞いた。なのに、殆ど呼吸音がしないのだ。普通肺がやられれば、呼吸は苦しくなっ
て吸うのも吐くのも一苦勞。なのに、そんな反応も無い。

間違いない、死へと向かっている。専門的な医学知識なんて持つ
てない俺でも、そう思う。

正直言えば、使ったこともない魔法が本当に効くのか、とも思う
が・・・やるっきゃないな。

「ベホマ。」

懸念に反し、回復魔法はあっさりと使えた。

強い光に、一瞬目を顰め・・・その次の瞬間には、終わっていた。

「・・・うう・・・」

ベンさんが、僅かに身じろぎする。

「父ちゃん！」

「あなたっ!？」

「お父さん!？」

上から順に、サム、奥さん、娘さん。ものすごい勢いでベンさん
に飛び付いた。

俺？俺はさっさと離れたよ。突き飛ばされたくは無いからな。

ベンさんはまだ意識は戻っていないようだったが、顔色も良くな
ったみたいだし、呼吸も通常に戻っている。

試しに、もう1度第2の力を使ってみたけど、彼の享年は68に
まで伸びていた。

それが果たして長いのか短いのかは判然としないが、どうやら今
回の危篤を乗り越えたのは間違いないだろう。どうやら、うまくい
ったようだ。

再び力を押し込め、俺は後ろの方で見ていたイルシャさんの隣に
まで行った。イルシャさんも、口をパカッと開けて驚いている・・・
・顎が外れなきやいいけど。

「まさか・・・最大回復呪文ベホマが使えるとは・・・。」

呆然としていたようだが、俺が自分の隣に来ていることに気付く

と、すつげえ勢いで頭を下げてきた。

「どうも、ありがとうございます！いやまさか、お若いのにベホマが使えるとは・・・私からもうかお礼を言わせてください。」

「・・・頭を上げて下さい。そんな、感謝してもらえないようなことじゃありませんから。」

だって真の目的は、ノルマと200Gの歩合だし。

けど、イルシャさんは頭を上げなかった。

多分、落ち着いたらこのサム一家・・・いや、ベンさん一家かも、俺に礼を言ってくるんだろうけど、でも、あまり嬉しくはならないだろう。

『シユウ様、成功ですよ！予約数が1増えました。初仕事、達成ですね！』

（ああ、そうだな・・・）

ほら、このサンの言葉が1番嬉しい。そう感じる俺は、やっぱりもう、どこかズレてしまってるんだろうな。

・・・自分でいうのも何だけど、随分と酷いことを考えてると思う。

けど、多分そうでもないとやってらんねーよ。神様なんてさ。

結局のところ、さっさと開き直るのが吉、ってか？

6 死神初仕事（後書き）

主人公の初仕事は予約、つまり人助けでした。でも、本人はそれで感謝されるのに少し違和感を感じてます。

そして、中身はもう人間じゃない自分を再確認。

基本ギャグの話のつもりですが、この件に関しては少しシリアスに。どの道、避けては通れませんかね。

というか、これからも時々少しシリアスが入るかも知れません。

感想・評価など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1820ba/>

死神になりました

2012年1月13日15時50分発行